
奪われた記憶

十六夜 空夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奪われた記憶

【Nコード】
N3620I

【作者名】
十六夜 空夜

【あらすじ】
時を止める能力を持った少女は人から蔑まれながら生きてきた。生きる為に山奥を駆けていた彼女は崖が見えずにそのまま転落してしまう。

そんな時、外の世界にやってきた紫は彼女を見つけ……。

(前書き)

あくまでも二次創作であることを前提にお読みください。

雨の降る真夜中の暗い山道を、彼女は走っていた。

闇に染まる辺りの森、自由など感じさせない空、殆ど見えもしない目。

ぬかるむ足元はしつこく彼女の足に絡み、何度も彼女の動きを奪い、そして倒れさせる。

それでも彼女は走るのだ。走らなければいけない。逃げなければいけない。

逃げなければ殺される。

走っている途中に彼女はふと思った、「人……？ は、こんなに走っても意外と平気なんだ」と。

そう思うと、彼女の顔に不思議と自然に笑みがこぼれてきた。

しかしそれは余りにも酷な笑みだった。

化け物と言われ続けてきた彼女。両親にさえ蔑まれ、拳銃の果てに捨てられた。

この世界中が敵。人は自分達と違うものを敵と言っらしいからと彼女は割り切っていた。

(だって私は人と違う) そう思う事で彼女は自分を誤魔化していた。

彼女には、時を操る能力があったのだ。

生きる為に盗みをした。

生きる為に物を壊した。

生きる為にこうして走る。

ただ、認めて欲しかった。
ただ、居場所が欲しかった。

何処でも、誰でも良いから私を。
温かく、包み込んで欲しかった。

.....。

それにしても、考え事をしながら走ったのが運命の分かれ目だった。
其の小さな回想を考えずに走っていたら、まだ彼女は悩み、逃げて
いただろう。たった独りで。

彼女が前を見つめなおした時、其処には地獄まで続くのかと思うよ
うな深い深い崖があった。

刹那。

彼女の身体は其のがけ下に落ちることになる。

スキマ妖怪の八雲 紫は今日も一人、スキマ探索ツアーを楽しんでいた。

幻想郷内のスキマは大体回っているのでささっと見回り、次に外の世界を回る……というのが最近の紫のスキマ探検ツアーだ。

「さて、今日は何か面白いものが見つかるかしら？」

紫には大体の“面白いもの”の場所が分かる。

紫がこんなことを言っている日には彼女にとっての“面白いもの”がある日なのだ。

「あーら、今日はとっても面白い日なのかしら。まさか、こんな山奥で可愛い女の子を見つけるなんて。しかも私達幻想郷の能力持ち……」

紫は今日の“面白いもの”を優しく抱えてスキマを潜った。

紫が家に帰ると、其処には珍しいお客が居た。

「珍しいわね、レミリア」

紅魔館の主、レミリア・スカーレット。

「そりゃあ私だって気になるわよ、九尾の狐なんて滅多に見られるものじゃないわ」

紫は数日前に非常に珍しい九尾の狐を拾い、レミリアも其の噂を聞きつけてやってきたらしい。

後の藍のことである。

紫はレミリアにお茶を出して言った。

「其の子なら今は遊びにでも行ってると思うわよ」

「そう其れは残念ねまたの機会にするわ。ところで、其の人間はどうしたの？」

レミリアは紫が抱えていた見た目10歳程の少女を指差して言う。
「外の世界で拾ったの。能力持ちだからこっちに連れてきたわけ。
でも銀髪に整った顔立ちで可愛いと思わない？」

「最近の貴女は妙なものを拾うのが得意ねえ……。でもどうするの？
貴女が人間を育てるとは到底思えないんだけど」

レミリアは遠慮する事もなく物事の核心に突っ込んでくる。

「そうね〜」

紫はしばらく頭を抱えたような格好をしたあと、唐突にレミリアに
言った。

「ねえ、この子を紅魔館のメイドに育てたらどう？」

「ちよつと待って貴女正気？ 何があつたかも分からない、幻想郷
に来たばかりの其の人間をうちのメイドにしるって？」

「ええ、正気よ」

レミリアはじー……と紫の顔を見る。

紫は澄ました顔でお茶を啜っていた。

どうやら本気で言っているらしい。

「でもうちにはメイドは余るほど居るわよ」

「其のうちの何人が役に立っているのかしら？」

レミリアは「うっ……」と詰まったような声を出す。

確かに、紅魔館の妖精メイドたちは正直使えない。いやはや。

「だからってこんな見ず知らずの子を……」

「あら、今見てるじゃない。其れにレミリア、貴女の呼び方が人間
から子に変わったわよ」

レミリアはさらに詰まった声を出した。

凶星らしい。

「……そうねえ。有能なメイドが一人居てもいいかし……」

「でしょう？　そうでしょう！　じゃあ決定！」

レミリアが「ら」まで言い終らないうちに、紫は決定を下す。

「え……ちよっと！　決めたわけじゃないわよ！」

「さうて、未来のメイドさんはどんな風になるのかしらあ？　楽しみね〜」

八雲　紫、色々な意味において敵には回したくない。

「でもこの子、よっぽど怖い事でもあったんじゃないの？　気絶してるけどさつきから震えてる」

レミリアが少女の傍によつていつて言う。

「どうやら、メイドにする件はレミリアも完全に承諾したらしい。

「外の世界から戻ってくる間、其の子ずっと寝言で言ってたわ。『居場所が欲しい』『私は普通の子だ』って。能力のせいで人並みの扱いをされていなかったんじゃないかと思うの」

紫はレミリアの横で少女の顔を見つめる。

「ねえ、レミリア」

「何？」

「もしも目の前に辛い経験をした少女が居て、其の子の記憶を奪ってしまっておけるとしたら……レミリアならどうする？」

紫は少女の顔を見たままレミリアに問いかけた。

「貴女って、本当に遠まわしが好きね」

「で？」

「消すとか完全に捨てるとかだったら躊躇うけどね。それだった即実行するわ。と言うか紫、貴女そんな事も出来るの？」

紫の力はとても強い部類に入る。自己の能力以外のそれも出来るだろう。

「出来る……はずよ。実際に人間に使ったことは無いけれどね」

「それにしても本当に良いのかしら。私達の判断だけで勝手に幻想入りさせたあげくに遣わせるなんて……」

レミリアは戸惑いが抜けないらしく、何度も紫に問いかける。

「仕方の無いことだって、何回言ったらわかるの？ 時には本人の意思に関係なく行動しなければならぬ時だってあるわ。其れに、紅魔館以外に幻想郷内でいい身請け先はあつて？」

「……そうね。じゃあ頼むわ」

「いい？ 目覚めたらすぐにレミリアが付けてあげた名前を呼んであげるのよ」

紫は少女の額に触れて記憶を 奪う。

其の直後、少女は畳から飛び起きた。

「私は……あれ？ あれ？ えっと……お嬢様。私の名前って何でしたっけ？」

レミリアは紫に耳打ちする。

（紫！ あんた何か余計な事したでしょう！）

（別にこれと言った事はしてないわ。レミリアにお供についてきて、ちよっと崖から落ちて頭を打った事にしておいたけど）

（そういうことは先に言いなさい！）

レミリアは一呼吸してから少女の方に向き直る。

「お嬢様？」

「全く、自分の名前を忘れてどうするのよ。十六夜 咲夜？」

(後書き)

こちらのサイト様で初書きさせて頂きましたが……。
うーん、まだまだですね(汗)

咲夜さんがメイドになったのはどうしてだろうかと考えていたら浮かんできた話です。

そうです、妄想です()

では、ここまで読み進めてくださった読者様、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3620i/>

奪われた記憶

2010年10月9日17時35分発行